

オホ

オホサカフユノジン 大坂冬陣 (一)戦役

前一年豊臣氏の諸將が幕兵の計謀あること前田氏に漏らしたのは、慶長十九年三月十日附を以て、大野治長が書を利長に與へたを以て初とする。書中には今や秀頼の齡漸く長じ、武將たるの器量も備り、軍糧の蓄藏せらるゝもの福島正則の三萬石、豊臣氏の隠米七萬石、その他商賈の有するもの亦尠からざるが故に、速かに上坂して一臂の力を假さんことを求むといふにあつた。利長乃ち之に應へず、その書を駿府に上らしめた。既にして利長の病篤かつたから、本多政重を高岡に招きて身後の事を託し幾くもなきて死した。利長の政重に對して遺圖を明らかにしたことも、復徳川氏の嫌疑の避けるにあつたと思はれる。しかも大坂方に在つては尙秋波を前田氏に送り、六月十二日大野治長は書を利常の臣長連龍に與へて、自ら利長の葬儀に參することを得ざりしを謝し、八月十日には秀頼の名を以て、再び利常の密謀に參與せんことを求めた。この年十月朔利常江戸を發し、信濃路を経て十日越中の境に至つたに、申刻徳川秀忠の急使から大坂出陣の命を傳へられた。利常即ち一日一夜に駛せて金澤に歸つたといふから、その到着は十一日であつたであらう。利常の軍令を出したのは十三日、奥村永福を金澤城代とし、小松城に前田長種、大聖寺に近藤甲斐、七尾に三輪吉宗、大井直泰、魚津に青山直正、富山に津田義忠、今石動に篠原清了を置き、本多政重・長連龍・前田知好・篠原一孝・山崎長徳・山崎長常・岡島一吉・富田重政・富田宗高等の諸將皆之に従うた。當代記

(二)出師 十四日利常城を發して小松に宿し、十五日大聖寺に入り、十六日越前藤生津に營し、十七日は終夜行軍して、十八日朝海津から琵琶湖を横ぎり、十九日大津に着した。廿二日家康は近江の永原に著陣したので、利常は之に謁し、廿四日大津を發して磯城に至り、廿九日磯城を發して天神森に着した。十一月二日利常又天神森を發して河内砂村に次し、五日高安、六日小山に宿し、七日攝津田邊に至つて關兵し、十日矢野、十三日阿部野に轉じ、十七日住吉に赴きて家康に謁し、攻

際の計謀を聽取した。この日以後利常の本營は阿部野に在つたが、前軍は岡山口に派せられて大坂城に對峙し、十二月三日初めて攻撃動作に従つた。翌四日利常本多政重伯母湖山を襲はんとし、山崎長徳と先を争うて進んだに、關渡敵城との距離を測ること能はず、誤つて眞田丸の崖下に迫つたから、城將眞田幸村の兵に銃丸を兩注せられて大に苦しみ、爲に多くの死傷を出した。但し伯母湖山は我が軍の占領する所となつたので、先陣をこゝに進め、利常の本營は木野村に移された。この日以後戦局は急に發展せず、前田軍に在つても十一日銃炮を伯母湖山に集めて城中に猛射した外見るべきものなく、以て廿一日和議成立の時に及んだ。

(三)停戦以後 慶長二十年(元和元)元且利常は尙木野村に在つたが、二日秀忠の岡山の陣に至つて新正を賀し、爾後屢將軍に謁し、又婚和條件に基づく大坂城の破壊工事を巡視した。同月廿一日戦役の事務略終つたから、利常は將士の功あるものを賞し、廿四日木野村

して近江の和邇に至り、二日今津、三日越前正田、四日今庄、五日加賀の大聖寺を経て、六日金澤城に凱旋した。

オホサカハ 大澤 鳳至郡七浦庄に屬する部落。大澤内記所載文安三年十月二日判書に、『能登之國大澤村之内黒杉分之事。此内屋敷二、所上大澤・下大澤内在之。』とあるから、もと下大澤といつたのが、今の大澤に當る。能登名跡志には、『上大澤より大澤村まで二十四町餘あり。内記とて利家公より十村役あり。簡井氏なり。先祖は此邊の郷士の由。』と記する。

オホサカハ 大澤 珠洲郡木郎郷に屬する部落。能登名跡志に、『大澤村というてあり。近年里人に告ありて掘出せし地蔵尊あり。』とある。

オホサカハ 大崎 河北郡井上庄に屬する部落。

オホサカハ 大崎 河北郡井上庄に屬する部落。